

書評

古川照美／千葉浩美編

『ミス・ダイヤモンドとセーラー服
——エリザベス・リー その人と時代』
(中央公論新社、2010年、380頁、1700円)

齋藤元子

本書は米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会により設立された福岡女学院の第九代校長エリザベス・リーの伝記である。『ミス・ダイヤモンドとセーラー服』というタイトルは、「頭脳も感情もダイヤモンドのようにきらきら輝いていた」と人々が形容したリーのパーソナリティと、下駄履きに和服という当時の女生徒たちの心身を解放するためにセーラー服という洋装を導入したリーの功績を象徴している。

本書は次のような内容により構成されている。

第1章 備えの時 —誕生から来日まで (1888～1914年)

第1節 少女期とその時代背景

第2節 教育者リーの原点 —母校マウントホリヨーク大学

第3節 最初の教師経験と運命の出会い

第2章 大正時代の日本における活動・福岡女学校時代

—使命・希望・挫折 (1915～1924年)

第1節 アメリカの女性宣教とその教育観

第2節 日本における宣教事情と女子教育

第3節 リー校長の誕生と校勢復興事業

第4節 教育方針と宣教活動

第5節 地元社会による受容と理想実現を求めて

第6節 予期せぬ帰国 ―その事情と宣教の果実

第7節 和服から洋服へ ―エリザベス・リーが自ら語る「セーラー服の出来るまで」

第3章 リーが出会った日本の社会状況

第1節 エリザベス・リーが見た日本女性たち

第2節 日本女性服装史におけるセーラー服導入の意義と特色

第3節 女性宣教師とロマンティック・ラヴ・イデオロギー

第4節 メイクイーンの遙かな旅路―太古の習俗から女学院のイベントまで

第4章 再起と国際的活躍（1925～60年）

第1節 再起・始動・国際舞台へ―女性平和運動との出会い（1925～40年）

第2節 ラテンアメリカ宣教への尽力―メソジスト教会伝道局婦人部幹事して（1940～54年）

第3節 難民の国際的保護 ―第二次世界大戦後から1950年代の難民状況

第4節 メソジスト海外援助委員会での活躍（1954～60年）

章立てを一覧しただけでも、福岡女学院における活動を中心に、リーの生い立ちから離日後の更なる国際的な活躍に至るまでが丹念に検証されていることがわかる。本書は、日本の女子教育に尽力した一人のメソジスト監督派教会女性宣教師の伝記として読み応えのある書であると同時に、以下に述べる2点において注目できる著作であるといえる。

1 点目はこれまでほとんど論じられていなかった大正期における女性宣教師の活動を明らかにした点であり、2 点目は一個人の伝記の域にとどまらず、リーの活動を女性史・文化史の文脈の中に位置づける試みをおこなっている点である。

まず、1 点目であるが、これまでの日本における女性宣教師研究は、明治初期に来日し、外国人居留地において女学校を開設し、女子教育の基礎を築いた女性宣教師たちに焦点が当てられてきた。福岡女学院の設立母体である米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会を例にとっても、東京築地に海岸女学校（青山女学院の前身）を開いたドーラ・スクーンメーカーの伝記『しなやかに夢を生きる 青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生

涯』(棚村恵子著、2004年、青山学院)、長崎に活水女学校を開いたエリザベス・ラッセルの伝記『長崎活水の娘たちよ エリザベス・ラッセル女史の生涯』(白浜祥子著、2003年、彩流社)、評者が一昨年発表した『女性宣教師の日本探訪記 明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』(齋藤元子著、2009年、新教出版社)など、明治期に活躍した女性宣教師に目が向けられている。

リーが来日した1915(大正4)年当時は、明治初期の欧化政策の時代とは異なり、日清・日露戦争を経て、ナショナリズムが高揚し、反外国人、反キリスト教的風潮が生まれていた。よって、リーの女子教育を通じての伝道活動は、明治期の女性宣教師たちの活動とは、理念の面においても、実践の面においても、明らかな差異があった。日本人を教化・啓蒙するという姿勢ではなく、日本人の自尊心を尊重し、地元溶け込む姿勢が求められたのである。

本書によれば、リーの在任中、福岡女学院は地元社会に受け入れられる学校となるため、福岡市長や九州帝国大学総長など地元の有力者に「学校賛助員」に就任してもらい助言を受けたり、学校行事を積極的に一般公開したり、新聞等に学校に関する記事を掲載するなど、開かれた学校を目指した。しかし、その一方で、キリスト教主義教育の根幹を揺るがすような社会への迎合に対しては、断固として拒む姿勢があったと本書は指摘している。その姿勢の顕著な表れが、多くの授業時間を配置した聖書教育である。

女性宣教師により女学校が開設された明治初期においては、日本の女子中等教育は公の手によってほとんどなされておらず、公的に規定されたカリキュラムも当然存在しなかった。それゆえに、女性宣教師たちはキリスト教主義を柱として独自の女子教育を展開することが可能であった。ところが、明治も半ばを過ぎると、政府は女子の中等教育に着手し、全国に公立の高等女学校を設立した。リーが活動した大正期は、福岡においてもキリスト教系以外の公立・私立の女学校が複数存在した。福岡女学院は、キリスト教主義に基づく独自のスクールカラーを出しつつも、社会のニーズに応えるカリキュラムを組み、他校に劣らない教育内容を維持し、生き残りを図る努力を常に強いられていたのである。

本書には、1919(大正8)年のカリキュラム表が掲載されている。社会のニーズに応える形で、同年、学業に重きを置く第一部のほか、裁縫・家事に関する

る科目に重きを置く第二部が設けられた。第二部は、伝統的な良妻賢母の育成を目的に政府が設置した「実科高等女学校」に対応するものである。一方、第一部においては、公立高等女学校に比べて、英語の時間を多くし、音楽教育も重視した。また、第一部・第二部ともに、聖書教育に多くの時間を費やし、なおかつ、修身にも公立高等女学校を上回る時間を当てている。

本書は、国家主義的な社会の要求にできる限り応えつつも、キリスト教主義教育を貫いた大正期の福岡女学院の様子を、第九代校長エリザベス・リーの活躍を中心に描いたものであるが、女性宣教師により明治初期に設立され、逆境の時代においてもあらゆる努力を重ねることを通じて閉校を免れ、今日まで存続しているキリスト教系女学校の事例の書として読むことができよう。

次に2点目のリーの活動を女性史・文化史の文脈の中に位置づける試みについて、述べたい。本書は、編者として名前が記されている古川・千葉両氏のほか、5名の執筆者が、それぞれ専門分野の視点から、リーが活動した時代の社会状況やリーの活動の意義などについて論じている。第3章がそれに該当する部分であるが、それらは本書をエリザベス・リーという一個人の伝記という範疇を超えて、大正期の女性宣教師に関する研究書とも呼びうるものになっている。具体的には、リーを含む女性宣教師によりアメリカからもたらされた価値観が当時の日本女性にいかん浸透したか、あるいは、リーが女子学生の制服として考案したセーラー服が日本服装史の中にかん位置づけられるか、あるいは、リーが福岡女学院の行事として導入したメイポールダンスがどのような歴史的背景を有しているかといった事柄が明らかにされている。

本書の編者は、第3章の論稿について「リーの業績を日本の社会状況や時代背景の中で立体的に位置づけるために重要で不可欠なものである」と記しているが、伝記の新しいスタイルの試みと捉えることができよう。従来の伝記の中には、一個人の生涯を丹念に記録することに終始し、その人物がどのような社会的あるいは文化的な状況の中に生きたかは不明瞭なものが散見される。それらに対して、本書の試みは、上記の編者の言葉に加えて、大正期という先行研究のほとんどない時代の女性宣教師の活動を、研究の蓄積がなされつつある明治期の女性宣教師の活動と対比させようという意味においても、意義のある試みであると言えよう。

書評『ミス・ダイヤモンドとセーラー服』

最後に一つ残念な点を挙げると、巻末に索引がない点である。本書には、第3章を中心に、福岡女学院関連にとどまらない多くの人物や事象が取り上げられている。巻末に人物ならびに事項の索引が掲載されていたならば、参照が容易となり、研究書としての利用価値がさらに高まったであろうと思う。

(お茶の水女子大学・講師)